様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月　６ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２７１４

研究課題名（和文）シネヘン・ブリヤート語をはじめとしたモンゴル諸語の「文」の完結性に関する研究

研究課題名（英文）Finiteness in Mongolic languages: especially in Shinekhen Buryat

研究代表者
山越　康裕（YAMAKOSHI, Yasuhiro）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：７０４５３２４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、モンゴル諸語の文法記述において「文」がどのように規定されるのか／「文」が何をもって完結するといえるのかを明らかにすることを目的とした。とくに代表者がこれまで継続して現地調査・言語ドキュメンテーションにあたってきたシネヘン・ブリヤート語を中心とするモンゴル諸語で、「文」という単位がどのように規定されうるのか、おもに音韻・形態・統語面から分析を試みた。その結果、いくつかの指標の束を多く満たすほど「文」らしさが高まるが、必要十分な規定は困難であること、文を完結させない形式（副動詞）で完結させる言語もあること、そこに地域差があることなどを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
この研究課題では、「文」という単位はどう定義されうるのかを、モンゴル諸語の自然発話資料をもとに分析を試みたものである。結果として、文末であることを示すいくつかの指標をより多く満たすほど「文」らしさが高まるが、十分な定義は難しいと結論付けた。つまり、規範的には「文」は決まるが、記述的には「文」は非常に定義が難しい発話単位だといえる。この結果は、類似した文法構造を有する日本語や、逆に大きく異なる他言語における「文」らしさ、文の定義を検討するための問題提起として、当該分野において重要な意義をもつといえる。

研究成果の概要（英文）：This project aimed to clarify mainly two questions in Mongolic languages from the viewpoint of descriptive linguistics: (1) how "sentences" are defined, (2) what constitutes a complete sentence. In particular, we attempted to analyze how the unit "sentence" can be defined in Mongolic languages, mainly Shinekhen Buryat spoken in Inner Mongolia, mainly from the aspects of phonology, morphology and syntax. As a rusult, I pointed out that the more parameters a 'sentence' fulfils, the more likely it is to be a 'sentence', but it is difficult to define it sufficiently, that some languages use non-complete forms (converbs) to complete a sentence, and that there are regional differences in this.

研究分野：言語学

キーワード：モンゴル諸語　ブリヤート語　副動詞　finiteness　記述言語学　言いさし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## １．研究開始当初の背景

代表者はこれまで、中国内モンゴル自治区北部、フルンボイル（呼倫貝爾）市で使用されるシネヘン・ブリヤート語を中心にモンゴル系言語の記述的研究に従事し、同時に言語ドキュメンテーションをおこない、当該言語その他の一次資料を収集・蓄積・公開を進めてきた。
)。しかしながら、テキスト資料を公開する際に、資料内のデータをどのような単位で区切るのが望ましいか、という点について、長く問題意識を持っていた。テキスト資料は一般的に「文」を単位として例文に番号を振っていくが、その「文」をどのように規定すべきかがモンゴル諸語研究において十分に検討されていなかったためである。

モンゴル諸語はチュルク諸語やツングース諸語、日本語などと同様、述語が文末に位置する SOV 型言語であり、従属部は主要部に常に先行する。これは節と節との間でも同様で、従属節は常に主節に先行する。また日本語の「～テ形」のような動詞屈折形式があり、複数の節が連なりあって一文を構成することが可能である。とくに代表者が採録してきたような自然な発話においては、二つ以上の節を含む長い一文が構成されることが多い。たとえば「そしてその二人の男子は化け物の間に入って一晩中交替で競走し、一人は帽子をかぶって一匹の化け物と、もう一人はブーツを履いてもう一匹の化け物と一晩中競走し、そして夜が明ける頃にその二人の男子は化け物たちに話している」といった、多くの節が連結した発話がひんぱんにおこなわれる。これは日本語の、とくに話し言葉で「～して、～して、～」のように連結するケースがよく見られることに類似している。このとき、シネヘン・ブリヤート語の文法構造において「文」を規定しうる手がかりとして想起する指標は二つある。a) 述語人称小詞の接続、b) 定形動詞による文終止、である。これらは文の定形性 (finiteness) を判断する手がかりと言い換えることもできる。

ただし、a) の述語人称小詞は 3 人称を欠いており、3 人称が主語となる場合には接続しない。さらに引用節にもこの述語人称小詞は接続するため、述語人称小詞が常に文末を示すということにはならない。一方、b) の定形動詞が用いられていることも文末であることを示す手がかりとなりうる。たとえば定形動詞直説法現在時制は動詞語幹に-na~-ne~-nɔ という接尾辞が付加されることであらわされる。この形式による判断は一見有効な基準といえる。しかしながら、引用節末尾にもこの形式があらわれうるうえ、現在時制以外では、日本語の連体形におおよそ相当する、非定形の分詞形が文末で用いられるのが一般的である。つまり、分詞のような非定形動詞も定形動詞同様、文を終止できるため、定形動詞の出現を手がかりとするのも有効ではない。分詞の文末用法は古いモンゴル語では限定的であるのに対し、シネヘン・ブリヤート語では非常に発達しているという違いもある。

シネヘン・ブリヤート語以外のモンゴル諸語もほぼ同様のふるまいを見せる。しかも多くのモンゴル諸語は述語人称小詞のような主語人称を示す標識ももたないため、さらに文の規定は困難となっている。それにもかかわらず、これまでの記述研究においては「文」がどのように終止するのかという点については触れられてこなかった。こうした問題に加え、もう一つの動詞屈折形式である（副詞節述語となる）副動詞が、いわゆる「言いさし」によって文末に位置することもある。しかしながら「言いさし」を「言いさし」と認めるためには「文」を何らかの基準によって規定する必要がある。こうしたし」を「言いさし」と認めるためには「文」を何らかの基準によって規定する必要がある。以上のような状況から、モンゴル諸語をはじめとするこれら言語で「文」とは何かを考えることが、文法記述において必要不可欠であると考えた。

## ２．研究の目的

本研究課題の目的は次の 2 点である。シネヘン・ブリヤート語をはじめとするモンゴル諸語で、1) 文がどのように完結するのか、その手がかりを探ること、2) 文を終える形式に関して諸語内で差異が見られるのかを明らかにすることである。さらに、3) 言語データの公開を他者利用が可能なかたちで研究期間内に積極的に進めることも目的とした。

## ３．研究の方法

以下、大きく二つの方法をとった。まず 1) 代表者自身が継続して現地調査・言語ドキュメンテーションにあたってきたシネヘン・ブリヤート語の採録済み音声データとあらたに収集する音声データを対象とし、音韻・形態・統語の各面から「文」という単位がどのように規定されるのかをいくつかの指標に基づいて分析し、他のモンゴル諸語の既刊言語データを対象に同様の指標の適用が可能かどうかを検討した。続いて、得られた結果をもとに 2) モンゴル諸語内において、言語間にどのような差異が見られるのかを比較・対照した。

そのため初年度（2017 年度）に中国・内モンゴル自治区にて夏季にシネヘン・ブリヤート語の現地調査を、2 年目（2018 年度）にモンゴル国にて冬季にモンゴル語出版物を対象とした調査をそれぞれ実施した。当初計画では 5 年間の研究期間でできるかぎりの現地調査をおこなう予定であったが、2019 年度は他の業務等で時間を確保することがかなわず、2020 年度および 2021 年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大により現地調査を断念せざるを得なかった。

## ４．研究成果

研究期間における成果は以下のとおりである。

研究目的 1) 文がどのように完結するのか、については、文末標識が比較的明確なシネヘン・ブリヤート語においても、１．研究開始当初の背景で述べた a), b) の指標を満たすケースは比較的多いが、必要条件としても十分条件としても十分な定義にはなりえないこと、そしてその他の指標、たとえば音声・音韻面ではイントネーションパターン、音声的休止といった指標も、自然談話では有効ではないケースが多く見られること、このことは節連結が複雑になるほど顕著であることなどを確認し、音韻・形態・統語の各指標を多く満たすほど「文」の切れ目、つまり文末が明確になる傾向が見られそうだという結果を得た。ただしこの点については数量的分析を行っていないため、明示的な研究成果としては公刊できていない。今後、異なる類型的特徴を有する言語間でも対照する必要があると考えている。

さらに 1) に関しては、シネヘン・ブリヤート語を対象に「指標を満たさない文」について、どのようなものが見られるのかを確認し、その統語的特徴を明らかにした。成果としては a) Sentence-final possessive markers in Shinekhen Buryat (2017 年, The 13th Seoul International Altaistic Conference (SIAC2017)), b) Influence of Chinese on Buryat in China (2018 年, 1st International Workshop on Contact Languages: The East Asia-Indian Ocean Connection), c) A Suffix or a Clitic? The Negative Marker "_gui" in Buryat (2019 年, The 14th Seoul International Altaistic Conference (SIAC2019)) といった国際学会にて発表した。

ひとつめの a) は述語人称小詞ではなく、所有人称小詞が文末に用いられている例を分析したものである。通常、ブリヤート語では文末で述語人称小詞が主語をあらわす標識として用いられ、所有人称小詞は文中、つまり文を閉じない箇所で用いられる。しかしながら、この所有人称小詞を用いて発話を止める、つまり文を閉じることがある。このときには義務・勧誘モダリティが付加されること、このような効果が付与されるのは「言いさし (insubordination)」の通言語的傾向と合致することを指摘した。

続いて b) は、中国語の影響によってシネヘン・ブリヤート語がどのように変化したかを報告したものである。動詞の屈折体系にいくつか特徴的な変化が見られることに加え、文末小詞にも借用が見られることを指摘した。この文末小詞の借用は、中国語およびシネヘン・ブリヤート語双方において「文末」であることを話者が認識しているからこそ導入されうる。そのため、構造が異なる言語間でもある程度、文末を意識する共通の指標が存在することが示唆される。

そして c) では、動詞にも名詞にも付加されうる否定標識 gui に関して、接尾辞とみなすのがよいか、後接語とみなすのがよいのかを観察し、ひとまず音韻的特徴より接尾辞とみなすと結論付けた。この否定標識は接辞／接語双方の特徴を満たす要素であり、「文末」でも文中でも用いられる要素である。ただし、周辺のモンゴル諸語で動詞に gui が接続する際には、名詞的な特徴を有する分詞形にする必要があるのに対し、ブリヤート語では「文末」位置でのみ、定動詞にも接続する。この点については「ブリヤート語分詞の定動詞化は一方向の変化か：主節述語における定動詞・分詞の「中和」」（2021 年, 日本言語学会第 163 回大会）として発表した。このような現象も、話者が「文末」を意識していることから発生すると見られる。

一方、対象をモンゴル諸語にひろげて分析した 2) に関しては、中国青海省・甘粛省を中心に分布するモンゴル諸語（シロンゴル・モンゴル諸語と総称されることが多い）と、モンゴル高原を中心に分布するモンゴル諸語との間で、非定形動詞が「文末」で使用される傾向に地理的差異が見られることを指摘し、最終的に「シロンゴル・モンゴル語条件副動詞の 「言いさし」(insubordination) の発達」（2021 年, 『津曲敏郎先生古稀記念集』pp.125–145, 北海道立北方民族博物館）として公刊した。モンゴル高原側では分詞の「文末」使用が発達し、一方シロンゴル・モンゴル諸語では条件副動詞の使用が発達しているが、どちらも「言いさし」と位置付けられる可能性が高い。この傾向が何に起因しているのかはさらに分析・検討を重ねる必要があるが、シロンゴル・モンゴル諸語に関しては周辺諸言語でも同様に条件形式の「言いさし」が確認されることや、モンゴル高原より北方に分布するツングース諸語では分詞の「文末」使用が発達していることなど、地理的な類型の可能性が考えられる。

そして 3) については、想定以上に成果を残すことができた。未公刊データであった民話の公刊 A Shinekhen Buryat Text: Foals with Golden Breast and Silver Buttocks (2022 年, *Asian and African Languages and Linguistics*, 16, pp.291–307）をおこなったほか、既公刊資料に関しては、オンラインデータベース「モンゴル諸語テキスト資料集成」(https://mongolictxt.aa-ken.jp/) を構築し、音声・文法情報（グロス）・英訳・日本語訳を付し、さらに検索機能を追加することで他者利用しやすい形に整え、公開することができた。新型コロナウイルス感染症の拡大という不測の事態に見舞われたが、オンラインデータベース構築のために予定していた経費に、本来調査旅費に充てる予定だった経費を追加したことでよりよい形に整えることができたのは、不幸中の幸いであった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>YAMAKOSHI Yasuhiro | ４．巻<br>15 |
| ２．論文標題<br>A Basic Vocabulary of Khorchin Mongolian | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>アジア・アフリカの言語と言語学 (Asian and African languages and linguistics) | ６．最初と最後の頁<br>139～170 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.15026/99900 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>山越康裕 | ４．巻<br>0 |
| ２．論文標題<br>シロンゴル・モンゴル語条件副動詞の 「言いさし」(insubordination) の発達 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>津曲敏郎先生古稀記念集 | ６．最初と最後の頁<br>125～145 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>YAMAKOSHI, Yasuhiro | ４．巻<br>- |
| ２．論文標題<br>A Suffix or a Clitic? The Negative Marker "_gui" in Buryat | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>Proceedings of the 14th Seoul International Altaistic Conference: Grammars of Altaic Languages | ６．最初と最後の頁<br>93～108 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>YAMAKOSHI Yasuhiro | ４．巻<br>13 |
| ２．論文標題<br>Introduction: “Altaic-type” Languages | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>アジア・アフリカの言語と言語学 (Asian and African languages and linguistics) | ６．最初と最後の頁<br>1～5 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.15026/92948 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>YAMAKOSHI Yasuhiro | 4．巻<br>16 |
| 2．論文標題<br>A Shinekhen Buryat Text: Foals with Golden Breast and Silver Buttocks | 5．発行年<br>2022年 |
| 3．雑誌名<br>アジア・アフリカの言語と言語学 (Asian and African languages and linguistics) | 6．最初と最後の頁<br>291～307 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.15026/117166 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>山越 康裕、ヤマコシ ヤスヒロ、YAMAKOSHI Yasuhiro | 4．巻<br>2 |
| 2．論文標題<br>モンゴル語族の文法書 | 5．発行年<br>2022年 |
| 3．雑誌名<br>アジア・アフリカ言語文化研究 別冊（Journal of Asian and African Studies, Supplement） | 6．最初と最後の頁<br>39～72 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.15026/116958 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>山越康裕 | 4．巻<br>CSEL 23 |
| 2．論文標題<br>移住による語彙借用とその調査手法について | 5．発行年<br>2022年 |
| 3．雑誌名<br>アルタイ諸言語を対象とした環境の変化と言語の変容に関する総合的研究 | 6．最初と最後の頁<br>155-168 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　3件／うち国際学会　6件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>山越康裕 |
| 2．発表標題<br>Excelデータを辞書っぽく |
| 3．学会等名<br>リンディフォーラム：ウェビナーシリーズ |
| 4．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山越康裕 |
| ２．発表標題<br>「言いさし」の地域差：モンゴル諸語を俯瞰して |
| ３．学会等名<br>言語学フェス2021 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山越康裕 |
| ２．発表標題<br>シロンゴル・モンゴル語の条件副動詞の「言いさし」 |
| ３．学会等名<br>第105回札幌学院大学言語学談話会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>YAMAKOSHI, Yasuhiro |
| ２．発表標題<br>A Suffix or a Clitic? The Negative Marker "_gui" in Buryat |
| ３．学会等名<br>The 14th Seoul International Altaistic Conference (SIAC2019)（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山越康裕 |
| ２．発表標題<br>モンゴル諸語の動詞屈折体系の記述を再考する：2014年以降の研究の流れを内省して |
| ３．学会等名<br>札幌学院大学言語学談話会第100回記念会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山越康裕 |
| ２．発表標題<br>スマホを使った言語再活性化の試み |
| ３．学会等名<br>全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」ポスター展示 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>YAMAKOSHI, Yasuhiro |
| ２．発表標題<br>Giving the Data Back to the Buryat Community: a ‘Story-telling’ Picture Book with a Smartphone App for Audio Playback |
| ３．学会等名<br>International Symposium "Endangered languages in Northern Asia"（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>YAMAKOSHI, Yasuhiro |
| ２．発表標題<br>Influence of Chinese on Buryat in China |
| ３．学会等名<br>1st International Workshop on Contact Languages: The East Asia-Indian Ocean Connection（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>YAMAKOSHI, Yasuhiro |
| ２．発表標題<br>LingDyTalk: A simple smartphone app applying a numeral recognition technique for audio playback |
| ３．学会等名<br>Third International Conference on Documentary Linguistics: Asian Perspectives (DLAP-3)（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山越康裕 |
| ２．発表標題<br>モンゴル諸語における分詞の統語機能と文末標識 |
| ３．学会等名<br>（十六科研等合同研究会）2017年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会，国内会議，ユーラシア言語研究コンソーシアム |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山越康裕 |
| ２．発表標題<br>モンゴル諸語における非定形動詞の用法の発達：日本語との若干の対照 |
| ３．学会等名<br>『外国語と日本語との対照言語学的研究』第23回研究会 |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>YAMAKOSHI, Yasuhiro |
| ２．発表標題<br>Sentence-final possessive markers in Shinekhen Buryat |
| ３．学会等名<br>第13回ソウル国際アルタイ学会（国際学会） |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山越康裕 |
| ２．発表標題<br>ブリヤート語分詞の定動詞化は一方向の変化か：主節述語における定動詞・分詞の「中和」 |
| ３．学会等名<br>日本言語学会第163回大会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>YAMAKOSHI, Yasuhiro |
| ２．発表標題<br>Two Khamnigan Mongolian verbs that correspond to Mongolian verb "bolokh" |
| ３．学会等名<br>International Conference on the Current Status and Future Perspective of Mongolian Language and Literature Studies（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山越康裕 |
| ２．発表標題<br>榎本武揚が書き取った「蒙古語」 はどのような言語だったか？ |
| ３．学会等名<br>言語学フェス2022 |
| ４．発表年<br>2022年 |

〔図書〕　計3件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>山越康裕・ハリヤ | ４．発行年<br>2021年 |
| ２．出版社<br>東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 | ５．総ページ数<br>24 |
| ３．書名<br>「あまもり」こわい：ブリヤートの民話 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>山越康裕・さねすえ | ４．発行年<br>2020年 |
| ２．出版社<br>東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 | ５．総ページ数<br>36 |
| ３．書名<br>白鳥と狩人：ブリヤートの民話 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>李林静・山越康裕・児倉徳和 | ４．発行年<br>2018年 |
| ２．出版社<br>三元社 | ５．総ページ数<br>256 |
| ３．書名<br>『中国北方危機言語のドキュメンテーション：ヘジェン語／シベ語／ソロン語／ダグール語／シネヘン・ブリヤート語』 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

モンゴル諸語テキスト資料集成
https://mongolictxt.aa-ken.jp/
モンゴル諸語対照基本語彙データベース
https://mongolicbv.aa-ken.jp/

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|